

観音菩薩の宗教

16

国際教養大学特任教授 金岡秀郎

念仏僧・空也上人の観音信仰

ブツダ入滅の後、五、六世紀を経てブツダの生前の姿を知る人はいなくなつた。大乘仏教はそうした時代の宗教であつた。それまで礼拝の対象はほぼブツダに限られていたが、大乘仏教では多くの尊格が登場し人々に尊崇されるようになった。それらの尊格は、時にブツダとは著しく異なる姿を示すものの、ブツダの遺徳の投影、追慕があつたことは間違いない。例えば、不動尊は背中に火を背負い上下互い違いの牙をむき、チベットやモンゴルの薬師如来は青い身体に描かれ、生前のブツダの姿からはほど遠い。

なかでも十一面千手千眼観音などの変化観音の身体にはブツダの面影が見出せない。しかしブツダは悲しきを調伏し、病気を治し、誰にも慈悲を施して衆生を済度したのであり、その功德が数百年を経て、こうした尊格の姿にも反映され解釈されていった。異形の身体の中にもブツダの徳が込められているということである。いわばブツダ以後の諸仏諸菩薩は、ブツダの有する多様な功德のスピリオフといつてよい。それにより衆生は個々の悩みや願ひに応じて祈りの対象を選ぶことができるようになった。

それら尊格のなかで観音菩薩が絶大な人気を博したのは、所願成就の範囲が無限定といえるほど広いことにある。ことに現世利益は観音菩薩の

最大の特性であつた。その理由について仏教美術研究の田中公明は、五、六世紀ごろヒンドゥー教の神々への対抗手段として観音信仰が仏教側に導入されたからと指摘している(田中公明『千手観音と二十八部衆の謎』春秋社)。それによれば、本来「仏教は煩惱を捨て去り、自我への執着を捨てて解脱を得ることを目的とする宗教であり、

「世俗的な願を叶えてもらう」というのは、仏教の本義に反することにもなりかねない」かつたが、シヴァ神やヴィシュヌ神などのヒンドゥー教の神々は宗教的な解脱だけでなく、「恋愛の成就や商売の繁盛、戦争や賭博の勝利など」の世俗的な願(ヴァラ)も叶えてくれた。観音菩薩はそれに対抗するため両者を調和させ、「信徒の世俗的な願望を叶えつつも彼らを最終的に菩提へ導く」尊格

となつた述べている(同書)。

こうして万能の尊格となつた観音菩薩は、他の諸仏諸菩薩の領域にも力を及ぼせた。これまでに筆者は観音菩薩の功德として、種々の苦から衆生を救うことや、女人を成仏させることなどを述べてきたが、今回は観音菩薩が死後の安寧、すなわち極楽往生をもたらし菩薩としても尊崇されたことを見てみたい。



空也上人立像。康勝作。鎌倉時代。六波羅蜜寺蔵。重文。117.6cm。(写真提供：六波羅蜜寺)

極楽往生は元来、阿彌陀仏の専権事項のごときであつたが、観音菩薩は念仏行者にも深く尊崇され、極楽に導く尊格としても信仰された。日本における空也上人の観音信仰はその一例である。

日本仏教研究に多大な業績をあげた速水侑は、現世利益を目的とした観音信仰に浄土教的な往生思想が加わつてくる経緯を綿密に考証した(『観音信仰』塙書房)。それを要約すれば以下の通りである。奈良朝の観音信仰の主流は密教的現世利益の信仰で、特に護国的思想を特色としたが、延喜・天曆(十世紀)に至り、天台六観音が成立し、六道に迷う亡者を救ひ浄土に導こうとする信仰が見られるようになった。延喜(九〇一〜九二二)を境として貴族社会に變動

が起こり、呪術的宗教から現世を否定する「厭離穢土」の思想転換がなされて浄土教が成立した。観音信仰内部でも同様の思想転換がなされ、それが天台六観音として現れた。そのうち成立した真言六観音では、千手観音などの変化観音が信仰され、貴族社会に広く浸透していった。やがて院政期(十一〜十二世紀)には、日本各地の観音霊場や寺院に詣る巡礼が盛んになり、殊に山中の霊場は「聖の住所」と考えられて修行者が好んで詣でるようになった。空也もそうした霊場を巡つたのであり、その後の活躍も、かかる思想的・社会的背景を有したものであつた。

空也は法然や親鸞の登場以前に「南無阿彌陀仏」の称名念仏を始めた僧侶とされる。空也が阿彌陀信仰のみの遊行僧と捉えられるのは、六波羅蜜寺の空也上人立像(重文)のイメージが大きい。空也滅後、およそ三百年して運慶の四男の康勝によって作られたこの像は、空也が称えた六字の念仏がそのまま

阿彌陀仏になつた様子を彫つたもので、教科書でもお馴染みである。空也の身体のリアリズムと口から飛び出す阿彌陀仏の宗教性の組み合わせは意想外で、拝観者に強いインパクトを与え記憶される。この視覚性が、空也といえは南無阿彌陀仏の定型を作り上げてしまったといえよう。しかし空也の生涯を伝記ともいうべき『空也上人誄』(空也誄)などから辿ると、阿彌陀如来一辺倒ではなかつたことが判明する。一体、空也の信仰とはどのようなものであつたのだろうか。

（速水、前掲書など）

空也は四十六歳ごろから、死体の遺棄場所であつた鴨川と葬送の地の鳥辺野を結ぶ東山六原を活動の拠点とし、自らの手で「金色の一丈の観音像」一、六尺の梵王、帝釈、四天王像各一を造る。今、西光寺に在り(『空也誄』)と伝えられる。西光寺は今日の六波羅蜜寺(真言宗智恵山派)であり、六波羅は地名の六原を大乘の思想に適う文字に替えたものである。この像は二メートル五九センチの十一面観音立像(国宝)で、現在、六波羅蜜寺に秘仏として祀られている。空也の研究者の石井義長は、空也の中で十一面観音菩薩は、人々を苦厄から救ひ、死後の極楽往生を約束する点で阿彌陀仏の功德と同質であつたと述べている(『阿彌陀聖空也』念仏を始めた平安僧』講談社選書メチエ)。観音菩薩が極楽往生を約束する菩薩でもあつた証左である。

見出せない。しかしブツダは悲しきを調伏し、病気を治し、誰にも慈悲を施して衆生を済度したのであり、その功德が数百年を経て、こうした尊格の姿にも反映され解釈されていった。異形の身体の中にもブツダの徳が込められているということである。いわばブツダ以後の諸仏諸菩薩は、ブツダの有する多様な功德のスピリオフといつてよい。それにより衆生は個々の悩みや願ひに応じて祈りの対象を選ぶことができるようになった。

それら尊格のなかで観音菩薩が絶大な人気を博したのは、所願成就の範囲が無限定といえるほど広いことにある。ことに現世利益は観音菩薩の最大の特性であつた。その理由について仏教美術研究の田中公明は、五、六世紀ごろヒンドゥー教の神々への対抗手段として観音信仰が仏教側に導入されたからと指摘している(田中公明『千手観音と二十八部衆の謎』春秋社)。それによれば、本来「仏教は煩惱を捨て去り、自我への執着を捨てて解脱を得ることを目的とする宗教であり、

「世俗的な願を叶えてもらう」というのは、仏教の本義に反することにもなりかねない」かつたが、シヴァ神やヴィシュヌ神などのヒンドゥー教の神々は宗教的な解脱だけでなく、「恋愛の成就や商売の繁盛、戦争や賭博の勝利など」の世俗的な願(ヴァラ)も叶えてくれた。観音菩薩はそれに対抗するため両者を調和させ、「信徒の世俗的な願望を叶えつつも彼らを最終的に菩提へ導く」尊格

となつた述べている(同書)。

こうして万能の尊格となつた観音菩薩は、他の諸仏諸菩薩の領域にも力を及ぼせた。これまでに筆者は観音菩薩の功德として、種々の苦から衆生を救うことや、女人を成仏させることなどを述べてきたが、今回は観音菩薩が死後の安寧、すなわち極楽往生をもたらし菩薩としても尊崇されたことを見てみたい。

となつた述べている(同書)。

こうして万能の尊格となつた観音菩薩は、他の諸仏諸菩薩の領域にも力を及ぼせた。これまでに筆者は観音菩薩の功德として、種々の苦から衆生を救うことや、女人を成仏させることなどを述べてきたが、今回は観音菩薩が死後の安寧、すなわち極楽往生をもたらし菩薩としても尊崇されたことを見てみたい。